

NEWSLETTER



大阪女学院大学 大阪女学院短期大学

教 員 養 成 セ ン タ ー

● 巻頭エッセイ「敬意と感謝、そして・・・ある総合大学の教育実習報告会に参加して」(森 均)	1
● 教育と人間(松尾 徹)	2
● 教職コラム1「教育実習の意義」(山本淳子)	3
● 教職コラム2「ブラック部活」は解消できるのか(富永 誠)	3
● 授業の玉手箱「多様性における英文法授業とは」(仲川浩世)	4
● 教職勉強会(仲川浩世)	4
● 教育実習(大学)(松尾 徹)・教育実習(短期大学)(大塚朝美)	4
● 編集後記	4

巻頭エッセイ

敬意と感謝、そして・・・ある総合大学の教育実習報告会に参加して

森 均

縁あってある総合大学の教育実習報告会に参加した。会場に着くと広いホールに教育実習を終えた4年生、来年度に教育実習を経験する3年生、それに20代の卒業生が数名、教職科目を教える教員も数名、合計150名以上の人が集まっていた。

報告会では、教育実習を経験した4年生が7～8名ずつ7班に分かれて報告を行う。班の構成メンバーは、学部も学科も異なり、教育実習先や教科も様々であった。

7つの班はそれぞれメンバーが集まり報告するテーマを決め、パワーポイントのスライドを8枚作成していて、開始直前に印刷された7班分のスライドが配布された。なお、報告会の運営は学生に任されていた。

始まった当初は教育実習の報告会らしく、「生徒との距離感が難しかった。」「先生があんなに忙しいとは思わなかった。」「生徒の名前を覚えるのに苦労した。」等と率直な印象が語られ、聞いていた学生からも、生徒の名前を覚えるにはこんな工夫をしたなど実践例が紹介され違和感なく進行していった。しかし、中盤になると雲行きが怪しくなってきた。

ある班が実習生として見て感じたICT活用状況の報告の中で、あるグラフが示されたが「出典を示すべきである。」「信憑性が担保されていないのではないか」等といった質問が置かれた。立ち尽くす学生達・・・。「国別比較より、学校別に生徒一人あたりのPC導入台数を示した方がよいのでは」と無理な注文をつけられ、さらに苦渋に満ちた表情を浮かべる学生達・・・。教育現場の葛藤を報告した素晴らしい内容だったが、だんだんと学会の口頭発表で袋叩きにあっているような様相を呈してきた。さらに本論とは関係の薄いことで「こうすべきだ」「ああすべきだ」と言う意見が連発されると、その班の学生の表情はさらに陰鬱なものになっていった。幸い、次の班の報告者がその空気を敏感に感じ取り「重たい空気になっていますが・・・。」と前置きして、大阪弁で報告したので雰囲気は改善された。

すべての班の報告が終わると最後に講評を依頼され、簡単な自己紹介のあと思いつくまま次の9点を話した。

- 1 学校には私立と公立があり、法律の立て付けが異なること。公立の教員は地方公務員法、教育公務員特例法などが適用されるが、私立の教員には適用されない。

- 2 連絡帳を書く際、誤字・脱字は厳禁。保護者の不信を招く危険性が高まる。文字は下手でも丁寧に書くこと。
- 3 赤色や緑色の見にくい生徒がいること。その場合の板書に仕方について実践例を紹介
- 4 発問時の生徒のあて方について実践例を紹介
- 5 入学前に生徒の名前を覚えておくことで生徒が驚くとともに心をつかめること(他の教員の実践例の紹介：私にはできない)。
- 6 教育実習時のICT活用については、ハード・ソフト両面とも学校によって状況が異なるので、指導教員と十分協議すること。
- 7 私の若い頃に先輩教員から言われた話しの紹介
20代で教科指導のプロに(生徒からどこで何を質問されても瞬時に答えることができるようになること)
30代 学級経営のプロに(学級担任として学級経営の腕を磨きあげること)
40代 学校経営に携わること(主任を経験し意見の異なる先生方をまとめること)
そして、管理職をめざすか、一教師の道を選ぶかいずれ決断することになる。
- 8 我が国はこれからインクルーシブ教育が進展していくので、例えば放送大学で特別支援学校教諭免許状を取得しておいた方がよい。
- 9 提案型の教員になってほしい。例えば「こうした方がよいと思います。」とか「このように表現すればもっと素晴らしいものになると思います。」といった言い方で。

真に伝えたかったことは9である。

とつぷりと日の暮れた道を駅に向かいながら、報告者や発表者に敬意を払う言い方をすること、感謝する心を持って質問することを学生に教えることが必要であると思った。一方で本学の学生はすでにこのことを身につけており、枝葉末節の部分で袋だたき状態にされた場合の対処方法も身につけておかなければならないと思った。例えば、指摘された部分の非は認めつつ「本論の部分で質問をお願いします。」と言えるように。

ふと気がつくと駅はもうすぐそこだった。新たな課題を見つけた高揚感に浸りつつ、今日一日、関わっていただいた学生はじめ関係の皆さんに感謝しながら改札口をめざした。

教育と人間

松尾 徹

教育と人間は教職課程を選択することを考えている、または興味がある大学1年生の学生を対象に開講されている夏季集中講座である。この講座の狙いは教育問題・課題への理解、教育困難・課題を克服する使命感、創造性のある教育活動を行う能力、協働して教育課題に立ち向かうための支え合う同僚性などの項目について理解を深め、これからの教員に求められる資質、能力を身につけることの意義に触れることである。

今年は8月9日から11日の3日間で行われた。1日に90分の授業が2コマまたは3コマで構成されている。授業のスタイルは講義形式で行われるものもあるが、多くはワークショップやディスカッションを中心に進められた。真夏の暑い時期にも関わらず、8名の学生が受講し、真剣に授業に取り組んだ。

初日の1つ目の授業は「今、教育に求められているものは」と題して現代の様々な社会問題を扱う新聞記事を資料にして、詳しい解説がなされた。例えば、「ヤングケアラー見えぬ現状」という記事を通して、大人に代わって、日常的に家事や家族の世話をする子供の現状について詳しく学び、小学生の約6.5%がヤングケアラーであること、このような子供達を早期に発見することが社会的な大きな課題になっていることを学んだ。他にも「特別支援を全教員に経験を」や「デジタル教科書、紙も大事の声」など現在の教育で課題になっている事柄を学んだ。受講生からは「教員になるために今求められていることの内容から教員として必要なことなど幅広く色々なことを学べて楽しかったです。」や「教育現場の現状を知れてとても良かったです。」と好評であった。

2つ目の授業は「教員に必要な振り返り」というテーマであった。まず最初に受講生は教員に必要な要素をブレインストーミングし、模造紙に書いて発表した。その後、KASA(Knowledge, Attitude, Skill, Awareness)モデルの枠組みを用いて、学生が発表した要素がどの項目に当てはまるのかを話し合った。その後、Awareness(気づき)の要素に当てはまるものが少ない事を確認して、目の前で起こっていることへのAwarenessがなければ、教員として成長していくのが難しいこと、そして、振り返りの知識と技術がAwarenessを高める手助けをすることを学んだ。



その後、教員が自分の授業を系統的に深く振り返ることの大切さ、振り返りの知識とスキルが授業を改善していく際に必要不可欠であることを学び、実際にコルプの経験

的学習サイクルに従って、系統的に振り返る体験をした。受講生からは「振り返りのやり方がわかった。」「振り返りの大切さが理解できた」という感想が聞かれた。

2日目の最初の授業は指定図書の大村はま著『灯し続けることば』を読み、国語教師であった著者の教育哲学に触れ、感じたことを討論した。具体的には担当教員が本の中で印象に残った言葉(例、生徒が自分の力で頑張ってきたという自信から生きる力をつけるように仕向けていくことが教師の仕事なのだと思います。)を受講生に発表してもらい、その後、学生が大

切にしている言葉とその理由をクラス全体で共有した。

次の授業では「新聞記事に見る教育課題」と題して教師が現場で直面している問題について討論した。長時間勤務が原因で適応障害を発症した大阪府立高校の先生が、府に損害賠償を求めた訴訟の判決で、大阪地裁が原告の請求通り府に230万円の支払いを命じた新聞記事を学生に示し、①何が原因であったのか ②どうすれば良かったのか ③再発防止に向けてとの観点で、3つのグループに分かれてディスカッションし、それぞれ発表した。

学生たちからは、「一人の先生に仕事が集中するのはよくない」「もっと早く他の人に相談したら良かった」「先生の数が必要でないなら、採用数を増やすべき」といった多くの意見が出された。まとめとして、文部科学省が部活動を先生の職務として認めていないことや、教職手当4%が支給されていることで、残業代が出ないということも伝え、学生たちからは先生の勤務条件の改善と風通しの良い職場環境の必要性を改めて認識したという声が聞かれた。

最終日の最初の授業では「やる気を引き出すテクニック」と

題して、動機づけに関わる理論(内発的、外発的、自己決定理論)について学び、その後学習者をやる気にさせる具体的な要因(社会要因、個人要因、外的世界とつ



なが要因)について理解を深めた。これらの理論と具体的な要因を踏まえて、実際にどうすれば学習者をやる気にさせることができるかについてブレインストーミングの方式で話し合う時間を持った。「これまで、物に釣られてやる気を出したことはあったが、自分が教師になったら物で釣らずにやる気にさせる方法を考えたい」「生徒の学習意欲を高めるための引き出しをたくさん作りたい」といった意見が出された。

次の授業では「高校生を教え、教えられるながら」と題して、卒業生の木南さんに講演をお願いした。木南さんは現在、私立高校で勤務して2年目になる。採用1年目からクラス担任をしている木南さんが学級経営を行ううえで大事にしているのは、自分のクラスが学校で一番きれいであるよう環境を整えることである。その理由はゴミ1つなく、黒板の隅々まできれいであることで心が落ち着き勉強にも集中できるからである。また、物事を常に生徒目線・教員目線の2パターンで捉えるようにしているという言葉が印象に残った。教員としての立場から生徒と接するなかでも、生徒の心情を思いやり、担任が1番の味方であることを心がけているそう。また授業以外では気軽にフレンドリーに接しているが、授業中は生徒も先生も敬語でコミュニケーションを取り合うとのことであった。

このように、木南さんの講演は体験に基づいて、学級経営、生徒指導、教科指導、部活指導について具体的にわかりやすく話して下さり、さらに私立高校の教員採用試験の概要まで説明して下さったので、受講生にとっても大変参考になったと思う。実際に受講生からは木南さんの「毎日学校に来てくれてありがとう」という気持ちで接している」という言葉が印象的であった。木南さんのようにオンとオフを分けられるような教師になりたい。OJの卒業生ということもあり、私達に必要なこと、就職のことなど詳しく知ることができたと大変好評であった。

最後の授業では全体の振り返りを行い、受講生にそれぞれの授業で感じたことや学んだことを書いてもらった。この3日間の学びが受講生にとって教職課程への興味を喚起し、さらに真摯に取り組むきっかけとなってもらえれば幸いである。

教職コラム1

教育実習の意義

山本 淳子

今年度は10名の大学生、2名の短期大学生が、各自の母校や近隣の中学校、高校で教育実習を行わせていただいた。本稿では、実習に送り出す側として思ったことを述べたい。

学生達にとり教育実習は、それまでに大学で学んだ理論や知識を教育の現場で試すことになり、まさに教職課程の集大成と言ってもよいだろう。毎回指導案を作って授業を行うことはもちろん、現場の先生方の指導を受けながら、授業だけでなく、授業以外の教育活動にも参加して教職についての知識や理解を深めることも教育実習の大きな意義と言える。

いうまでもなく、実習期間中は大変忙しい。授業の指導案を作ったり準備をすることで精一杯で、そのような課外活動に参加する余裕がないこともあるかもしれない。しかし、学生にはこの授業以外の教育活動に真剣に取り組むことをあえて勧めたい。

教育実習を終えた学生から、「同じことをやっているのに、クラスによって「学習意欲」に差がある」「やりやすい雰囲気のあるクラスと、やりにくい雰囲気のあるクラスがある」といったことを耳にすることがある。確かに、クラス全体の雰囲気というものとは存在し、学生の言っていることは良く理解できる。それと同時に、クラスを構成するのは、さまざまな個性や経験を持つ一人一人の生徒であることを常に意識しなくてはならないと思う。Ushioda(2020)は、学習者の意欲を高めるためには、「person-in-context relational view」(p. 34)、

つまり「関係性を重視し、生徒一人一人の学習意欲を、状況・背景の中で捉えるアプローチ」に注目する必要があると述べている。30名の生徒がいれば、30通りの生き方がある。短い実習期間中でそれぞれの状況を捉えることは至難の業であるが、1名でも多くの生徒のコンテクストを理解するのに役立つのが授業以外における生徒とのふれ合いである。

部活動を見学したり、時には得意な分野で指導をしたりすることも可能であろう。それができなくても休み時間を一緒に過ごしたり、廊下で立ち話したり、帰り際の生徒に声をかけたりといった何気ないやりとりでも構わない。授業以外で生徒と接することは、個人個人の理解につながると同時に観察力が養われ、いわゆる「やる気スイッチ」も見つけやすくなるのではないだろうか。生徒たちも、声をかけてもらったことで実習生を身近に感じ、より心を開き、ひいては授業での発言も活発になるであろう。

これまで、私が巡回指導を担当した学生達は、授業以外にも積極的に生徒に話しかけていたと思う。時にはこちらの思いが通じないこともあるだろうが、それに必要な経験である。様々なストーリーを持つ生徒達と接しながら、「教員になりたい」という思いを改めて強く持ってもらいたい。

参考文献

Ushioda, E. (2020). Language learning motivation. Oxford University Press.

教職コラム2

「ブラック部活」は解消できるのか

富永 誠

学校の先生の長時間勤務が問題となって久しいが、その原因の一つとして部活動の指導がある。先生たちは授業や教材準備、テスト作成や採点等を行い、放課後には会議に出席、部活動の付き添いと非常に多くの校務をこなし、勤務時間を超えることもしばしばである。中には土日祝日に大会や発表会等の引率をしている先生もいて、これらを全て合計した一か月の労働時間は、デッドラインと言われる80時間を優に超過する。

生徒たちが部活動を行うためには、現状では先生に顧問を引き受けてもらう必要がある。頼まれた先生は、生徒の気持ちを考えると断ることもできず、中には2つも3つも顧問を兼任している方もいる。競技歴や指導経験のない先生が顧問を引き受け、その負担感から心身症となって休職するケースも少なくない。もはや個人や学校レベルの努力では解決できない深刻な問題となっている。

そんな中、スポーツ庁の有識者会議「運動部活動の地域移行に関する検討会議」は2022年6月、公立中学校の運動部活動の方向性について提言をとりまとめた。

少子化や先生の業務負担等を背景に、中学生等のスポーツ環境を学校単位から地域単位の活動に変えていくことで、生徒たちがスポーツに継続して親しむことができることを目指す。2023年度からの3年間を重点期間とし、都道府県が休日の運動部活動の地域移行に向けた具体的な計画を策定し、市町村が実務を進めていくこととしている。

これを受けて大阪市では、2022年より都島区内中学校5校の生徒を対象に、体育科を設置する大阪府立の高校を拠点として、5つの種目(サッカー、バスケットボール、バレーボール、ボート、陸上)から選択し、専門性の高い指導者から指導を受けるモデル事業を立ち上げ、休日部活動の段階的な地域移行のため実践研究を進めている。

高校にもこの動きは広がりつつある。大阪府教育委員会は2023年度から複数の府立高校が土日や夏休みなどに合同で部活動をする案を示した。全ての全日制府立高校で一緒に部

活動をする高校のペアを検討する。自転車で15分以内の場所にある高校同士が対象で、指導経験のある先生が複数校の部活動を担当することで先生たちの負担を減らしつつ、生徒も専門的な指導を受けることができる。特定の先生の負担増にならないように約150人の外部指導員も確保する。

これらの動きは学校現場としては大歓迎であろう。長年にわたって先生たちのボランティア精神に支えられてきた「ブラック部活」の解消に向けて、ここへきてようやく大きなねりが起こっている。先生たちは自らの時間と家庭を犠牲にしながら、それでも生徒たちの笑顔のために歯を食いしばって頑張ってきたが、解放されるのである。

課題は運営にかかる費用と指導者の確保等が考えられる。学校などの施設設備を使用する場合、学校単位の活動であれば当然無料だが、地域移行となると費用が発生することもありうる。指導者の人材確保も、わずかな報酬で休日等に継続的に指導していただける方が見つかるのかどうか大いに疑問が残る。当然ながら受益者(生徒・保護者)の経済的負担が増える可能性がある。

それらの課題があるとしても、学校から地域への流れを更に加速すべきである。現に、試験的に導入した学校においては、「部活動指導に割いていた時間を授業準備、テスト作成や採点の時間に充て、生徒たちと向き合う時間が増えたのはありがたい。」という声が聞こえてくる。

ヨーロッパでは、学校に部活動がない国も少なくない。スポーツを楽しみたいという生徒の機会は学校が提供し、更に競技力を高めたい生徒は地域のスポーツクラブに所属するか、国が関わる組織で育成するということに整理していく必要がある。

これまで、学校の部活動に過大な役割を求めすぎてきた。学校は生徒たちが常に明るく前向きに生活することが可能な場であるべきで、そのためにはまず先生たちが笑顔であることが大切である。また、生徒たちにとって、スポーツ本来の楽しさや他者とのふれあいの機会が確保され、更に充実したものとなることを切に願う。

授業の玉手箱

「多様性における英文法授業とは」

仲川 浩世

本学が日本の大学では国際性3位（女子大学では1位）と評価されて久しい。小規模な大学ではあるが、国際性が豊かなことは、英語教育環境が充実していることの証である。今年度より留学生の入学者が増加し、日本人学生はコミュニケーション手段として、授業内外のどちらにおいても、英語の使用が求められるようになってきた。お昼休み、休憩時間、授業中の私語(?)でさえもべちゃくちゃと英語のおしゃべりが聞こえてくる。

この先は、「英文法」を授業でどのように扱うかが鍵となってくる。コンテンツを英語で学ぶ授業などは、「英語を英語で」という手法でなされてきた。しかしながら、本学では「英文法は日本語で」という取り組みが基本となっている。大学、短大共に文法クラスを着任以来担当しているが、今年度は昨年度までとは大きく異なる状況が見られる。それは、留学生の存在である。上位クラスであればあるほど、留学生の人数が増加し、授業も「文法を日本語で指導する」から「英語で指導する」にシフトしてきた。

もちろん、大半が日本人クラスの場合は、これまで同様「日本語を用いて文法を指導する」ということに変わりはない。しかしながら、上位クラスは、大半の学生が日本語よりも英語の方が得意な留学生で成り立っている。一方、日本で生活していくためには、留学生にとって日本語作文能力は必須である。例えば、「仮定法」「受動態」「完了形」という文法用語には馴染みがなくても何ら問題はない。しかしながら、卒業後、日本で就職するのであれば、「日本語の読み書き・作文」に慣れておくことが望ましい。最初は、「日英、英日作文」の演習問題を「英文法」の授業内で避けるべきではないかと考えていたが、このような状況を考慮すると、「容易く点数が取れる試験」は必ずしも学生のためになるとは限らない。

上位クラスの特長として、普段和やかに（賑やかに）英語を用いて活動していても、一端、文法解説や、「日英、英日作文」を中心とした試験を行うと、真摯に取り組むことが観察される。これは、自主的な学習習慣の定着の表れであると推測される。そのおかげもあり、学習意欲が高く、和気あいあいとした雰囲気となり、多様性の中で見られる独自の充実した授業の実施が可能となった。

このような教育環境を、日本在住の状態でありながら経験できるとは、長い教員生活を通して、非常に幸運なことであると感じている。これからも、女学院の多様性に相応しい、独特な「英文法授業」作りに対し工夫を重ね、学習者が生き生きと学ぶ環境に貢献したいと願う。

教職勉強会

仲川 浩世

教職勉強会は今年で6年目となる。春学期は第10回教育実習報告会とし、大学4年生3名、短大2年生1名が教育実習の振り返りを発表した。既に、大多数の学校ではオンラインから対面授業へと移行したため、実習生は生徒達との直接的な交流を持つことが可となり、様々な経験談を参加者と共有した。特に①情報交換を目的とした実習生同士の横の繋がりが、②英語が苦手な生徒のサポートや教材の工夫、③給食の手伝いや体育祭といった自主的な活動の参加という報告を聞き、成長した実習生の姿を目の当たりにし、教職に携わる立場として非常に嬉しくもあった。と同時に「何を事前に伝えるべきか」ということに関し、より一層明確にしていかなければならないと実感した。

また、注意しなければならない点として、SNSに対する対応が挙げられた。昨今、SNSの拡散が当たり前になりつつあるため、実習生にその気はなくても、実習校の方で投稿されることもあり得る。これからの時代の教育実習の懸念事項として、配慮する必要がある。

一方、第11回教職勉強会では、第1部に教育実習報告会として、大学4年生3名、短大2年生1名が教育実習報告について経験談を分かち合った。特に、第11回勉強会の発表者の共通の気づきとして、「授業で話す声量」が挙げられる。一般的に、教員は「大声」になりがちではあるが、若手の頃は、自分の声に自信が持てるかどうか？疑問である。現在はマスクを着用して授業に臨むため、実習生にとってはこれまでで

上に「通る声で授業を行う」ことは困難に感じたと推測される。このことは、第2部の富永先生のご講演「学校現場は本当にブラック？」の内容にも関連している。福利厚生面等においては、民間企業に劣らず、教員の仕事は恵まれている。しかしながら、新人教員にとって授業の準備、実施だけでも過酷な業務である。さらに、週末を返上した部活動指導、保護者対応等は、心の病の原因となり、このような状況は実際のところ、存在する。その要因の背後には、若手の相談相手となるベテラン教員（40代後半から50代）の数が不足していることも考えられる。

教育実習生と富永先生のご講演から、決して教員の仕事は楽ではないと分かった。だが、本学で学んだことを活かして、これからの未来を担う子供たちのために貢献するという役割を果たし、将来の選択肢の候補のひとつとして、教員という職業を検討して貰いたいと願った。

【第10回教職勉強会】

2022年（令和4年）7月25日（土）13:20～14:50

テーマ：「教育実習報告会」

参加者：23名（短大5名、大学11名、教員6名、事務職員1名）

【第11回教職勉強会】

2022年（令和4年）12月3日（土）13:20～14:50

テーマ：「教育実習報告会」

「富永誠先生ご講演：学校現場は本当にブラック？」

参加者：10名（短大2名、大学4名、教員4名）

教育実習（大学）

松尾 徹

今回大学4年生10名が教育実習に臨んだ。コロナ禍のために実習の開始時期は実習校によって6月、一番遅い実習は10月からとバラバラであった。実習校も公立と私立中学校の両方で行われた。筆者は私立中学校での実習生の研究授業を見学した。実習生の担当クラスは中学1年生で、10名程度の少人数のクラスであった。朝のホームルームの時間から1限目の授業の間に自主学習の時間があり、生徒たちはそれぞれ、タブレットを使っての英単語学習を行っていた。タブレットを一人1台持っており、それを活用して様々な学習を進めている生徒の姿を見て、さすが私立だなと感じた。同時にICTの普及は学校によって本当に様々であることを再認識した。

肝心の研究授業であるが、実習生は緊張していたが、大きな声でしっかり授業を進めており、机間巡視もきちんと生徒のノートを見て理解度を確認しながらできていた。授業中もきくと生徒のノートを見て理解度を確認しながらできていた。研究授業後の会議の中で教頭先生から「今までの中で一番良かった。良く授業準備をしていて、私をもっと授業準備をしっかりしないとダメだと反省させられたくらいだ」とお褒めの言葉を頂いた。実習生も頑張った甲斐があったと感じているようであった。

授業進行で1点気になったことがあった。授業中に生徒が教科書の英文を写して、和訳を考えることをしていたことだ。これは今までなら宿題にして、授業中には意味理解の確認後、教科書の英文を使っての自己表現の活動などに使う方が良いのではないかと考えたからである。実習生に尋ねてみると、機械翻訳を使うとすぐにできてしまうので、授業中にどの程度わかっているのかを確認するためであるとの事であった。やはり中学校の現場にも機械翻訳の影響が出ているのだと改めて感じた出来事であった。機械翻訳の英語学習への活用の仕方については教員の中でも意見が分かれているので、これからの英語教員には避けて通れない課題になるであろう。筆者自身も色々気づきと学びが多い教育実習見学となった。

教育実習（短期大学）

大塚 朝美

2022年度は2名の短期大学生が教育実習に臨んだ。大学のカリキュラムでは3年次に実習を見据えて英語科教育法などのクラス内で模擬授業を行うのに対し、短期大学では2年次の4月から英語科教育法を履修するため、実習がスタートする5月や6月までのわずかな期間で教育実習に備えなければならない。授業の組み立て方、指導案の書き方を大急ぎで説明し、実際に指導案の作成を行い、模擬授業も最低1度は行ってから実習に送り出さねばならず、短期大学から実習生を送り出すまでは一瞬も無駄にすることが必要である。

そのような状況の下、2名の学生は無事に実習を終え、それぞれが過ごした中学校での3週間は教育現場の厳しさを知り、また教員という職業について色々と感じ、考える時間となったことだろう。コロナ禍ということもあり、近畿圏外の学校訪問は見送らざるを得ず、1名の中学校のみ訪問を実施した。その実習校では、熱中症が発生したために途中で行事が中止になるといったハプニングもあり、そのような緊急事態に教員はどう動くべきか、保護者対応や生徒たちの誘導など普段の実習とはまた違った特別な経験をしたようだ。実習校訪問が叶わなかったもう1名の中学校では、教育実習生が今年度は本学からの1名のみだったこともあり、かなり手厚くご指導頂いたことが学生の話からも伺えた。校長先生をはじめ、色々な先生方からテーマを設定した講義をしていただき、指導教諭以外からも学校現場のお話を聞く機会があったとのことだ。

教育実習の体験は、今後教職に就くか否かにかかわらず、学生にとっては大変貴重な体験となる。今年度も無事実習を終えられたことに感謝したい。



編集後記

★本年も無事にNLを発行できましたことを感謝申し上げます。未だコロナ感染者は減っていませんが、教職に関わる多くの行事を対面で行うことができ、人と直にコミュニケーションを取る大切さを再認識しています。これからも教職に関わる学生と先生方と学び合って進んでいきたいと願っています。（松尾徹）

★NL編集に携わるのは本年で2度目となりました。これからもOJの教師教育を盛り立てていきたいと願っています。この場を借りて、NLの発行にご協力いただきました、皆様にお礼を申し上げます。（仲川浩世）

大阪女学院大学・大阪女学院短期大学
教員養成センター Teacher-Development Support Center

540-0004 大阪市中央区玉造2丁目26番54号
Tel: 06-6761-9371 Fax: 06-6761-9373
Homepage: <http://www.wilmina.ac.jp/oj/?ttc=教員養成センターについて>
e-mail: tc@wilmina.ac.jp